

ODA

SAKUNOSUKE

and

The

criminal

of

christmas

—— Tokyo Neko-jin Blueberry ——

『あ、もしもし？ あの、俺……、そう啓太。あのさ、ちょっと、交通事故起こしてもうて、金が要るこ……うん、そう。20万なんやけれども、なんとかしてくれへんかなあ、ばあちゃん……。うん、ごめんな、こんな、クリスマスの日に……』

一月二日。俺はスーツ姿のまま、新大阪行きの新幹線に乗った。

荷物を荷台に置き、窓際の席に座ってマフラーを外し、品川駅で買った織田作之助をさっそく読み始めた。

本を読みながらだと東京大阪間などすぐで、窓の外が冬の大阪の街に移り変わってゆくのを見て俺は織田作之助にしおりを挟んだ。

新大阪からローカル線を二本乗り継いだあと、バスを使って、午後1時ちょい前におばあちゃん家に到着。

「ザ・おばあちゃん家」みたいな木造の平屋。その外見は去年（というか俺が生まれてからは）まったく変わっていない。唯一の変化は犬の「あけむつ」がいなくなったことくらいか。

俺はインターホンも押さずにドアを開き、

「おばあちゃん」

と家の中に向かって叫んだ。

すると遠くの部屋から、はあいよ、と聞こえたので、俺は靴を脱ぎ、声のした部屋に向かう。

このギンギン鳴りよるニスの剥げきった廊下を歩くのは一年ぶりで、何か変わったところはないかいと家の中をキョロキョロ見渡していると、ふすま越しにテレビの音が聞こえたので覗いてみた。この平屋で居間的役割を果たすその部屋に人の姿はなくて、小さなちゃぶ台の上に置いてあったリモコンでテレビの電源を切った。サランラップに包まれたリモコン。昔はそれを馬鹿にしていたけれど、一人暮らしの東京の家でも俺は同じことをしている。

テレビの横に掛けてあるコルクボードには万博のキーホルダーがまだぶら下がっていて、なんも変わってないことが嬉しくなるが、少しだけ心配になったりもする。

電話の近くに貼ってある「詐欺注意！」の貼り紙は、前回おばあちゃんが詐欺に引っ掛かったときに俺が書いたもので、でもそれは全然効果がなかったことが今回証明された。

玄関から一番奥の部屋、こたつを置いた畳みの部屋におばあちゃんを見つけて、俺は「おばあちゃん」と呼んだ。

こたつに入って蜜柑の皮を捲っていたおばあちゃんが「よう来たなあ」と笑った。去年の帰郷もこんな感じだったと思う。

荷物はてきとうに放り投げ、俺もこたつに入って蜜柑を剥く。

「おばあちゃん、また詐欺にあったって？」

「せやねん、せやねん。交通事故起こした言うてな、啓ちゃんが」

「だから俺はここには電話せえへんて言うたやろ？」

「そんな寂しいこと言いなさんな」

寂しい、か。冷たくなったのか？ 俺は。

東京の家にはないこたつがやたらと温かくて、俺は少し幸せな気分。

「いくら？」

と俺が訊くと、おばあちゃんは目えも合わせず、

「なにが？」

分かっるとるくせに。

「被害額や」

おばあちゃんがVサインをする。

「200万？」

「ちゃうちゃう、20万や」

前回の5倍か。これはちょっとシャレならんなあ……。

「なんですぐ信用してしまうん？」

おばあちゃんは蜜柑を一粒取り、

「いや途中でな、詐欺かな？ とピンと来たんやけどな、」

と云って口に放り込んだ。

「ほんじゃあ何故に……」

「けど、ほんまに啓ちゃんからの電話やったとしたら、かわいそ過ぎるやんか」

俺は「大丈夫やって」と云ったものの、何を根拠に大丈夫なんて云っているのか分からなくて、なんというか、俺ほんまに大丈夫なんか？

「スーツ姿は成人式以来やね」

「せやな」

「毎日それ着とるんか？」

「うんまあ、他にも二着あるけど、基本はこれ」

おばあちゃんは「そうかあ」と呟いた。俺はその呟きを、壁にかかったドデカいジグソーパズルを眺めながら聞いた。去年おばあちゃんと二人で何時間もかけて2000ピースをはめ込み、できあがったのは、眼鏡を掛けたペンギンが日光浴をしている絵だった……。あの時は完成の満足感に酔い痴れてわからなかったが、こうして冷静に見ると、意味不明。おばあちゃん家には、どうゆうつもりで買ったんや、というものが大量にある。十二時になると気味の悪い音楽と共に赤い鬼の人形が飛び出る掛け時計。年季を感じる大きな柱には、高さ120センチあたりのところに線が引かれてあって、そこには「タカシ」と書かれている。ちなみにうちの親族に「タカシ」なる人間はいない。……。

趣味の悪い雑貨屋みたいで、おもしろくて、俺は好きやわ。

俺はおばあちゃん家に一泊だけして正午の新幹線で帰った。

朝はおばあちゃんと近所をぶらついた。話題はもっぱら詐欺のことだったが、おばあちゃんが面白おかしく盛って話したので、常時楽しく過ごせた。

俺は俺に成り済ました詐欺師の「ごめんな、こんな、クリスマスの日……」というフレーズがツボにはまり、俺がそのフレーズを再現すると「ほ、本物やあ！」とおばあちゃんが笑った。俺も笑った。

。 帰りの新幹線の中は子供の声で騒がしく、俺はイヤホン付けて音楽で耳を塞ぎ、少し、考えた。

もしも俺がほんまに事故を起こして、大金が必要になって、でも手元にそんなお金がなかったとき、俺はいったい誰にお金を借りるやろか……。

きっとおばあちゃんやろなあ。俺は自分の非力を小さく嘆いた。

「俺のせいなんかなあ……」と呟き、舌打ちをした。

ふと顔を上げると、前の座席男の子が座席の上に立って背もたれを掴み、俺のほうを見ていた。野球帽を被った男の子は俺に向かって舌打ちをした。

俺はイヤホンを外し、「ちゃんと前向いて座りや」と注意した。すると男の子は再度舌打ち。俺はイラっときて、その子のおでこにデコピンをした。男の子は目を潤ませ、しかし泣くことなく、沈むようにシートの陰に隠れていった。

俺は、泣くなら泣けよ、と苛立ちながらケータイを取り出し、おばあちゃん家に電話を掛けた。おばあちゃん家の電話番号を登録していなかったのだから、今朝書いてもらったメモ帳を取り出して直接番号を打った。

コール。

コール。

コール。

こたつから電話までの距離を考えると、そうかもな。

「はい、もしもし」

やっとおばあちゃんが出た。

でも、でもさ、

俺は、なんか……、何を云えばいいのか、

というか何故電話を掛けたのか、分からなくて、黙っていた。

やばい。なんか泣きそう。

「啓ちゃんかい？」

俺がおばあちゃんの思わぬ一言に驚いて「よく分かったね」と言うと、「祖母の嗅覚や」と言って笑った。

そんな能力があるなら俺か詐欺師かなんて分かったんやないの？　と言いかけて止めた。理由は特にない。

俺は、とりあえず、「おばあちゃん、ごめんな」と謝った。長い沈黙のあと、おばあちゃんに「そういうのは直接言い。電話越しやと心配するやろ？」と言われた。御もっともです。俺はいくつになっても子供やな。ほんま幼稚やわ。

俺は泣いているのを勘付かれないように「うん」と言うのが精一杯やった。

泣いているのは、悲しいとか悔しいとかじゃなくて、なんて言うんやろ、分からん。ほんまに分からん。

電話を切ったあと、俺は眠った。

相変わらず車内は騒がしかったが何故だかよく眠れて、目覚めたときには窓の外に東京タワーが見えた。

俺はケータイを開き、リダイヤルの一番上にある電話番号をケータイの電話帳に登録した。

織田作之助の続きは、明日からの山手線の通勤電車に持ち越された。